

（動）移動、変化
（形）静止、安定
（動）流動、変化
（形）固定、安定

第七章 形容詞

第一節 形容詞及び其の活用

形容詞及び其の活用

動詞が物事の移動し、變化する屬性を表すに對して、靜止し、安定する屬性を表すものを形容詞と云ひます。言を換へて申しますれば、動詞が流動的屬性を表すに對して、固定的屬性を表すものを形容詞と云ひます。固定的屬性を表すものの中で、最も多いのは物事の有様を表すものでありますが、又「貴し」「賤し」の如く性質を表し、「嬉し」「悲し」の如く感情を表すものもあるのであります。

形容詞も動詞の如く活用いたします。其の活用形を排列するには、用言を連ねる形を第一活用形とし、言ひ切りの形を第二活用形とし、體言に續ける形を第三活用形とし、文語では助詞の「ども」を、口語では「ば」を連ねる形を第四活用形とするのであります。

文語の形容詞の活用

文語の形容詞の活用には二種ありまして、

舊く買ひたる帽子なり。「我が帽子は舊し。」舊き帽子を被れり。「舊

けれども捨てず。

の如く「い」「し」「き」「けれ」と活用するものと、

新しく建てたる家なり。」此の家は新し。「新しき家に移る。新しければ住心地よし。

の如く語幹に「し」を有する代に、第二活用形の「し」を缺くものとがあります。前の方を其の第一活用形を以て久活用又は久活と云ひ、後の方を語幹の末尾と第一活用形とを併せて志久活用又は志久活と云ひます。

口語の形容詞の活用

文語の形容詞には斯の如く二種の活用があります。口語の形容詞にはそれが一つに歸して、唯一種あるばかりであります。即ち

舊く買った帽子だ。「僕」の帽子は舊い。「舊い帽子を被つて居る。」舊ければ捨てる。

新しく建てた家だ。「此の家は新しい。」新しい家に移る。「新しければ住心地がよい。

の如く文語の久活用であつたものも、志久活用であつたものも、何れも「く」「き」「けれ」と活用するのであります。表に書いて御覽に入れます。

活用表

は活股をいふに用ゐる

志久活の第二活用形に「し」を重ねる慣例

種類	語幹	文				口			
		語				語			
久活用	ふ	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
志久活用	あたらし(新)	く	し	き	けれ	く	い	い	けれ

文語の志久活用の第二活用形に「し」を缺いて居るのは「し」の音の二つ重なつて耳立つからだらうと思はれますが中古の末葉から「烈し」「やさし」「い」とはしゝの如き用例がぼつゝ見えるやうになり鎌倉時代の軍記物室町時代の謡曲其の他に至りましてはだんくとなつて居ます。殊に徳川時代の浄瑠璃小説類には御承知の如く夥しくなつて居るのであります。彼の本居宣長翁の如き國學者ですら古事記傳に「あし」「あし」「悲し」を「悲し」などと用ゐて居られるのであります。それで例の文法上許容すべき事項には其の第二條に於きまして「志久活用の終止形を「あし」「勇し」などと用ゐる習慣あるものは之に従ふも妨なし」と規定してあります。「習慣あるものは」と斷つてありますのは「同じし」「甚じし」「ど」とれにも自由に云へる

ものでないからであります。

第二節 語幹活用形の用法及び其の名稱

語幹活用形の用法及び其の名稱

形容詞が活用致しまするのは、動詞が活用すると同様に、夫自身で文を結んだり、他の言や辭を連續したりする必要から起るのでありますが、形容詞は動詞と違ひまして、其の語幹が又種々の職分を有つて居るのであります。今語幹から始めて順次に其の各活用形の著明なる用法を申して見ようと思ひます。

語幹

(一) 語幹は次のやうな種々の場合に用ゐます。

(1) 「あなにくや」「あな悲し」「あいた」「おう、嬉し」などの如く、感歎の意を含めて終止に用ゐることがあります。

(2) 語幹は「白」「黒」「夜寒」「端近」の如く、獨立して又は他の語の下に附いて名詞となることがあります。これは久活に限りません。又文語の形容詞の語幹は、ありがたの世、めてたの人、あやしの賤、口惜しの契の如く助詞の「の」を伴ふこと、俗も名詞の如くに用ゐられることがあります。

感歎の語、三用

久活も他名詞
又助詞の「の」
フシ、恰も有同
如シ

5. 接尾語ヲ附シテ動詞トス

み。和歌ニテハミ

み。和歌ニテハミ

み。和歌ニテハミ

2. ヲ助詞トシテ

ふ。げ。よ。さ。う。に。が。附。いて。副。詞。に。なる。事。が。

mn

(3) 語幹は「痛」む(四段)「憎」む(四段)「強」へめる(文語下二段)「長」へめる(文語下一段)「怪」しむ(四段)「苦」しむ(四段)「樂」しむ(四段)「悲」しむ(四段) 等の如く或接尾語を附けて動詞に轉じることがあります。

Careful Carefully

English

(4) 語幹は「深」み「をかし」み「にく」さ「苦」しさの如く接尾語の「み」「さ」が附きますと名詞になります。語幹に「み」の附きましたものは「いぬる夜」の夢をはかなみ「まどろめば」底清み流るゝ水のさやかにもの如く上の語句と共に副詞に準すべきものになることもあります。和歌に限つた用法であります。又語幹に「さ」の附きましたものは「願」みもせて行く人のつれなさ「願」かなふることの「嬉」しさの如く感歎の意を含んだ文の述語を成すこともあります。文語に限つた用法であります。又「かたじけなさ」に涙こぼるる舟の「鬱陶」しさに陸に上るの如く更に「に」と云ふ接尾語を附けて夫自身又は上の語句と共に副詞に準すべきものになることもあります。

(5) 語幹は「ねむ」たげに「語」樂しげに遊ぶ。又は「ねむ」たさうに「話」す「樂」しさうに遊ぶ。の如く文語では「げ」に「口語」では「さう」に「が」附いて副詞になる事が

口
一
立
目
人
乙
ノ
ハ

$$\frac{2}{x'}$$

他、流ト訊
合ス

田、川、林、土、石、運、用、取、ト、云、サ、リ、理、由、

✓今日ハ、印スロトノ用ニ限ルベシ

但し変易動詞 兼ハ片ニソノ補
語トんミ

(二) 第~~一~~活用形の「く」は「口穢く罵る」詳しく話す。「口穢く」詳しくの如く、他の
 用言を限定する形であります。之を副詞形と云ひます。普通[○]の文典には
 動詞の第二活用形の名稱に従つて連用形と申して居りますが、動詞で連用
 形と云ふのは「蹴倒す」解けにくい[○]の如く、下の用言と熟語を作るのであるの
 に、これはさうではなくて、下の用言にかゝつて之を限定するので、互に混同
 すべきものではありませんから、私は大槻博士の命名に倣つて副詞形と云
 ふのであります。併し第~~一~~活用形の下に用言が来れば何時も之を限定す

(中止形)

中止取ハミ落トた
録体口語トミ
対話ニハ他ノ表現
用ラトシ

各同トシテ用フ
レサアリ

未然形
百九十一
見之

るかと思しするに、必ずしもさうではありません。收獲多くなる氣候が涼しくなるのやうに、下に變易動詞が來る場合には、其の補語になるのであります。それで副詞形と云ふのは其の多い用法に依つて名づけられたものだと思承知置を願ふのであります。

副詞形は其の語句を結び果てず暫し言ひ止して下の語句に連ねる場合があります。例へば「松青く、砂白し」性質も善く、品行も正しいの如きはそれであり、斯の如く用ゐましたのを副詞形から離して、特に中止形とも名づけます。中止形は動詞の所で御話し申しました様に、文語及び記録體の口語には用ゐられますが、對話體の口語には殆んど用ゐられません。松は青くて、砂は白い性質も善い、品行も正しいの如く、他の表彰法を取るのであります。

副詞形は「多くの人、遠くへ行つた」の如く名詞として用ゐられることもあります。併しかく用ゐるのは少數の語に限るのであります。

文語の形容詞の副詞形は「寒くば家に在れ、淋しくば友を集めよ」の如く助詞の「が」附いて、まだ成立しない條件を假定するに用ゐます。之を副詞形

から離して特に未然形とも云ひます。此の未然形に就きましては昔から一つの異説があります。それは「寒くば」「淋しくば」などと云ふのは「寒くあらば」「淋しくあらば」の「あり」と云ふ動詞を省いた形である。未然形でなくて普通の副詞形だと云ふのであります。此の説は意味の上から、又動詞との連續の上から、後の學者の従ふものが多く、現に大槻博士なども言海の語法指南には將然法と云ふのを特に設けて居られますが、廣日本文典には之を廢して副詞法に纏めて居られます。私なども實は左様であらうと賛成するのであります。けれども、今日の如く「寒くあらば」「淋しくあらば」と「あり」を入れる用法が無くなつて、専ら「あり」を省いて云ふ習慣になつた時代に於ては、もとはどうでもあれ、尙之を一つの規則として論じるのが宜しからう、何事でも總べて本に返つて説明するのは却つて間違つて居るだらうと思ひますので、かくの如く未然形と云ふ名稱を立てて置くのであります。

(三) 文語の久活用の第二活用形の「し」、志久活用の語幹、口語の第二活用形の「い」は「丈高し」「筋骨逞し」。又は「夏は暑し」「秋は涼し」の如く、物事の有様を言ひ切る形であります。之を終止形と云ひます。

(轉名)

文語の形容詞の終止形には其の儘で名詞になつたものがあります。例へば「からし芥子」「すし(鮭)」「おもし(重鎮)」「あかし(燈)」「たのもし(頼母子)」等はそれでありまゝす。又「なし」と云ふ形容詞は「母なし」「骨なし」の如く、名詞の下に附き、又は「友なし」「千鳥」「棚なし」「小舟」の如く、名詞と共に他の名詞の上に附いて熟語を作り、詮方なしに去る「相手なし」に話すの如く、助詞の「に」を連ねて副詞に準ずべきものになることがあります。

連體形

(四) 文語の形容詞の第三活用形の「き」、口語の第三活用形の「し」は「赤き花咲く」「恐しい夢を見た」の如く、下の體言を限定する形であります。之を連體形と云ひます。

文語の形容詞の連體形は「故き」を溫ねて「新しき」を知るの如く、名詞に準じて用ゐられることがあります。口語では「舊い」のを捨てて「新しい」のを買ふの如く助詞の「の」を伴ひます。

既然形

(五) 文語の形容詞の第四活用形の「けれ」は助詞の「ば」が附いて「既に成立した條件を表し、または(口)既に成立した條件を假定する形であります。例へば

既に成立した條件を示す
既に成立した條件を示す
既に成立した條件を示す

文語形ノ連體形
口語形ノ連體形
口語形ノ連體形

久活用

路程遠ければ行かず。(イ)
命長ければ辱多し。(ロ)

志久活用

貧しければ油を買ふ能はず。(イ)
人を遇する嚴しければ怨まる。(ロ)

此の形を既然形と云ひます。

假定形

口語の形容詞の第四活用形の「ければ」は助詞の「ば」が附いて、(イ)まだ成立しない條件を假定し、又は(ロ)既に條件の成立したものととして假定する形であります。例へば

寒ければ家に居ろ。(イ)

命が長ければ辱が多い。(ロ)

淋しければ二人で行け。(イ)

嚴しければ怨まれる。(ロ)

口語の普通の假定には寒いなら家に居ろ「嚴しいと人に怨まれる」のやうに尙他の表彰法があります。助詞の所で更に申し上げます。

文語の未然形既然形と口語の假定形との比較は動詞の所で申し上げた通

口語ニテハ普通假定形ハ「ば」ガ付キ、
ハニ別個ノ方付ヲトモセ

活用表

てあります。彼に準じて御類推を願ひます。
左に活用形の名稱を各活用形に配當して御覽に入れます。

	語幹	文			語			口			語		
		副詞形終止形	連體形	已然形	副詞形終止形	連體形	假定形	副詞形終止形	連體形	假定形	副詞形終止形	連體形	假定形
久活用	ふる(舊)	 く	 し	 き	 けれ	 く	 い	 い	 けれ				
志久活用	あたらし(新)	 く	 ○	 き	 けれ	 く	 い	 い	 けれ				

第三節 活用形の音便

副詞形の音便

形容詞の副詞形の「く」は「短う刈る」輕々しう振舞ふなどの如く、音便で「う」になることがあります。古くは盛に用ゐられましたが、今日の普通文にはあまり用ゐられませぬ。口語と區別するためでありませう。口語で「く」を「う」に申しまするのは西國に多くて、東國地方には殆んどありませぬ。唯「高うございませう」嶮しうございませうの如く、下に「ございませう」を伴ふ時に限つて常に之を起すのであります。

副詞形よりうう五
まはるくみくみく
山におちる中んよん
しんじやういませう
来ん庄限りませう
便いも都中ん
傳傳活んえん
おめ代傳傳
来ん庄限りませう

口語、形、副詞形、
（ノ原）

東國、促音

西國、ウ、イ、
便

連體形の音便
（文語）

口語の形容詞の副詞形に「て」の連なるときには、東國地方では間々促音を起し、西國地方では「く」を音便で「う」に云ひます。音便で「う」に云ふのは古い文語にはありますが、普通文には餘り用ゐませぬ。

髪が長くつてお化のやうだ。髪が長うて幽霊のやうだ。

むづかしくつて一も出來ない。むづかしうて一問も出來ぬ。

文語の形容詞の連體形「き」は其の子音が脱落致しまして「い」になる事があります。例へば「世に處するも亦難いかな。噫、悲しいかな。」の類であります。此の音便は今日の普通文には斯の如く「かな」と云ふ詠歎の助詞の附くときに限つて起るのでありますが、古くは「白いもの」「苦しい事」の如く稍廣く用ゐられたのであります。口語の終止形、連體形の「い」は、全く此の「き」の音便であります。終止形の「い」を「白し」「苦し」「のし」の音便の如く、説いて居る文典もあります。それが、それは、恐らく、誤で、動詞の連體形が終止形を同化して、遂に同形にして居ます。如く、連體形の音便の「い」が終止形をも同化して「了つたもの」であらうと考へます。

六ナ五頁左の
用ひたる代
表スアリ

形容動詞

文語の第一種
形容動詞

終止形ハ、
終ラタリ

第四節 形容動詞

固定的屬性を表すこと形容詞の如く、而も動詞の如く活用しまするものを形容動詞と云ひます。形容動詞には左の三種あります。

甲 第一種形容動詞

文語の第一種形容動詞は形容詞の副詞形の「く」と動詞の「あり」とが熟合して出来たもので、良變に活用いたします。古くは各活用形の總べてを具備して居ましたが、今日の普通文には終止形と已然形とを缺いて居ります。又連體形も下に名詞を連ねる場合には用ゐませぬ。

否定形——人出多からず。

連用形——來會者多かりき。

(終止形)——うるはしき貝石など多かり。

連體形——避暑に行く人多かるべし。

(世の中に多かる人をだに……)

yoka

かう、らう、有ク、
さ、か、う、け、
ス

べけんや↓
ハ、フ、シ、ヤ

yokaram, yokaram, yokam, yokam.
nakaram, nakaram, nakam.
Bekaramya, Bekamya, Bekamya
kare, Kare

口語の第一種
形容動詞

推量形

(既然形) (これならず多かれど書かず。)

命令形 — 幸多かれと祈る。

古くは未然形の「から」の「ら」を省いて、「よかば」「遠かば」の如くに云ひ、其の「か」を「け」に轉じて「無け」「惜しけ」「む」の如くにも申しました。今日でも尙「無け」「善け」「む」などと云ふことがあります。これは「無からむ」「善からむ」と云ふこととてあります。『べけんや」と申すのも、『べからんや」と云ふこととてあります。既然形の「かれ」は轉じて「けれ」となります。形容詞の既然形の「けれ」は此の「かれ」が轉じたので、此の種の形容動詞の系統のものであるのであります。

第一種の形容動詞は口語では否定形及び連用形ばかり存して居ます。但し意味の反對したものを並べて云ふ時に限つては命令形を存して居ます。否定形は下に助動詞の「う」を連ねて推量を表す時丈に用ゐますから、推量形と云ひます。連用形は助動詞の「た」が附くときには音便で促音に轉じます。

推量形 — 人出が多からう。

連用形 — 來會者が多かりさうだ。(多かつた)

活用表

命令形—遅かれ早かれ出来るだらう。

文	語				口				語
	語幹	形否定	形連用	終止形	形連體	形已然	形命令	形推量	
おほ(多)	から	かり	(かり)	かる	かれ	かれ	から	かり	終止形
									形連體
									形已然
									形命令
									形推量
									形連用
									形終止
									形連體
									形已然
									形命令
									命令形

乙 第二種形容動詞

百八十七頁 終止形 指定動詞の例

あり

文語の第二種形容動詞

文語の第二種形容動詞は「に」を履んだ副詞と動詞の「あり」が熟合して出来たもので、良變に活用致します。例へば「に」は音脱落する。

未然形—あたり静かならば移らむ。

よちりす

連用形—かしこも昔は静かなりき。

終止形—あたりに人家なければ甚だ静かなり。

連體形—樹木立籠りて静かなる所なり。

已然形—あたり静かなれば讀書に適す。

命令形—起居は静かなれ。

静か *ni ari.*
かな *na ri.*

第二種の形容動詞の成立

此の外此の種の形容動詞を作る副詞の語尾の「に」は「風靜かに浪穩かなり」の如く中止形に用ゐることがあります。此の形は「風靜かにて」又は「風靜かにして」の如く「にて」「にいて」と云ふこともあります。

第二種形容動詞を其の成立で分類しますと、凡そ次の六通になります。
 (一) 有様を表す語根又は語が「に」を履んで副詞になつたものが「あり」と熟合したもの。例へば

語根又は語	副詞	形容動詞	語根又は語	副詞	形容動詞
たへ （妙）	に	なり	まれ （稀）	に	なり
あやにく （嗟憎）	に	なり	まどほ （間遠）	に	なり
しきり （頻）	に	なり	みだり （妄）	に	なり
きれぎれ （切々）	に	なり	おもひおもひ （思々）	に	なり
いう （優）	に	なり	えん （艶）	に	なり
びんせふ （敏捷）	に	なり	くわつばつ （活潑）	に	なり

(二) 有様を表す語根に「ら」が付き、更に「に」を履んで副詞になつたものが「あり」と熟合したもの。例へば

語	根	副詞	形容動詞	語	根	副詞	形容動詞
たひ	平	らに	らなり	あは	荒	らに	らなり
きよ	清	らに	らなり	さかし	賢	らに	らなり

(三) 有様を表す語根又は語に「か」が付き、更に「に」を履んで副詞になつたものが「あり」と熟合したもの。例へば

語根又は語	副詞	形容動詞	語	根	副詞	形容動詞
のど	和	かに	しづ	静	かに	かなり
はつ	極	かに	ひそ	密	かに	かなり
ほこり	誇	かに	かなり	はる	晴	かなり

(四) 有様を表す語根又は語に「ら」が付き、更に「に」を履んで副詞になつたもの

か

ら

のが「あり」と熟合したもの。例へば

らか_よ

語根又は語	副詞	形容動詞	語根又は語	副詞	形容動詞
あき _明	らかに	らかなり	なた _{平穩}	らかに	らかなり
あら _荒	らかに	らかなり	やす _安	らかに	らかなり
おい _老	らかに	らかなり	めづ _珍	らかに	らかなり

(五) 有様を表す語根又は語に「や」「か」が付き、更に「に」を履んで副詞になったものが「あり」と熟合したもの。例へば

やか_よ

語根又は語	副詞	形容動詞	語根又は語	副詞	形容動詞
しな _靱	やかに	やかなり	たを _撓	やかに _{婀娜}	やかなり
たか _高	やかに	やかなり	わか _若	やかに	やかなり
はれ _晴	やかに	やかなり	つつま _包	やかに _約	やかなり
はな _華	やかに	やかなり	きは _際	やかに	やかなり

「あります」と熟合し、省略されて出來た「だ」又は「です」と云ふのがあります。一
つは「だらう」「だつた」「で」「だ」と活用し、¹「つは」「で」「せう」「で」「し」_(た)「で」「す」と活用致
します。共に連體形假定形を缺いて居ますけれども、前に述べた連體形・假
定形ばかり有つて居るものと相補助して、恰も同系の形容動詞のやうにな
つて居るのであります。

「だ」活用例

推量形——夜は静かだらう。

連用形——あすこも昔は静かだ

つた。

中止形——風は静かで、浪は穩やか

かだ。

終止形——近所に人家がないか

ら静かだ。

「に」を履むべき副詞の語根の「だ」の語尾を履んだものは通常の表彰法で「て」
すを履んだものは丁寧な表彰法であります。又「て」「ございます」を履むこと

「で」活用例

推量形——夜は静かでせう。

連用形——あすこも昔は静かでし

た。

中止形——風は静かで、浪は穩やか

です。

終止形——近所に人家がないから

静かです。

百十九頁

第1種形容動詞
格ヨス助詞ト

人形助詞

第2種形容動詞
格ヨス助詞ト

③

副詞に伴得

第3種形容動詞
詞と指定の助動詞

格ヨス助詞ト

指定助動詞

格ヨス助詞ト

体ヨス指定助詞ト

もあります。これも形容動詞に準ずべきもので「です」を履むものよりも更に丁寧云ふに用ゐます。「だ」ですの原形の「だ、ある」「だ、あります」を履むものも形容動詞に準ずべきものでありますが、記録にのみ用ゐられて對話には用ゐませぬ。

第二種形容動詞例へば「静かなり」「賑かだ(です)」の如きものを名詞に指定の助動詞の附いたもの例へば「人なり」「毛物だ(です)」の如きものと相混じないやうにしなければなりません。①「静か」「賑か」の如きものは「に」「なり」「だ」「です」等の語尾があつて始めて語を成すべきもので随つて「が」「の」「に」「を」等の助動詞を附けることが出来ませぬ、けれども「人」「毛物」の如きものは始めから名詞でありますから、自由に之を附けることが出来ます。②又「人なり」「毛物だ(です)」等は「雄々しき人なり」「熱帯の毛物だ(です)」の如く、體言を限定するものを附けることが出来ませぬ、けれども「静かなり」「賑かだ(です)」等には之を附けることが出来ませぬ。③「静かなり」「賑かだ(です)」は甚だ静かなり。「大層賑かだ(です)」の如く副詞を附けることが出来ませぬ、けれども「人なり」「毛物だ(です)」等は之を附けることは出来ませぬ。此等て以ても其の區別を辨へること

第三種の形容
動詞となるべ
き漢語

連體形―茫莫たる平野多し。

既然形―月光皎々たれば松影窓に上る。

命令形―男子は堂々たれ。

有様を表す漢語の「と」を履み、更に「しで」を附けたものは中止形として用ゐることがあります。例へば「古松亭々として瑞雲飄飄たり。」はそれであり
ます。

「たり」を履んで第三種形容動詞になる漢語は之を類別致しますると、凡そ
次の五種になります。

一、有様を表す一字の漢語―寂寥汎漠恍恍燦等。

二、有様を表す雙聲（雙聲とは二字の漢語の）子書（子書を同じくするもの）の漢語―參差（サシ）髣髴（フウブツ）忸怩（ニウニ）淋漓（リンリ）續（ヒツ）紛囂（フンキョウ）院等。

三、有様を表す疊韻（疊韻とは二字の漢語の）韻（韻を同じくするもの）の漢語―窈窕（ヨウテウ）娟嬋（セン）朦朧（モウロウ）爛漫（ランマン）潑（ハツ）刺等。

四、有様を表す疊字の漢語―悠悠皎々颯々颯々赫々駸々遲々等。

五、有様を表す漢語の「然焉爾如若乎」を履んだもの。

然―喟―悄―陶―欣々―得々―

焉―忽―湍―慨―悵―皇々―望々―

爾―蠢―鏗―莞―卒―騷々―洋々―

如―躍―豁―突―皎―侃々―閤々―

若―瞠―沱―嗟―沛―

乎―凜―照―浩―溫―渺々―蕩々―

第三種形容動詞例へば寂たり寥たりの如きものを名詞に指定の助動詞の附いた君たり臣たりの如きものと混じないやうにしなければなりません。其の區別は第二種の形容動詞の所に述べた所に準じて御會得下さるやうに願ひます。

活用表

語 幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
さん(燦)	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ